

東映京都撮影所「ポストプロセンター」を開設 試写室、MA、編集設備を集約

ワンフロアで一貫作業、音響制作環境を充実



試写室

ポストプロセンター
室長の横山真一氏は
「厚生会館には従来、
東映グループの制作

東映京都撮影所(京都市右京区)は今夏、編集やMAなどのポストプロダクションを担当する仕上げ部門を、「ポストプロセンター」としてリニューアルした。設備や機材も一新し、運用を始めている。

東映京都撮影所には11のステーションとオープンセットがあり、映画やテレビドラマ、CM、PVなどさまざまな映像制作に利用されている。

ポストプロセンターは新たに、撮影所内の厚生会館3階に設備を集約して運営される。フロアには試写室とMA室、アナライズ、フォーリー、エディトリアルルーム(オフライン編集室)4室、サウンドエディット3室を集め、センターサーバー、フレッド「NEXTIS」でネットワーク化することで、ワンフロアで作業できる環境を構築した。

ポストプロセンター室長の横山真一氏は「厚生会館には従来、東映グループの制作



エディトリアルルーム



撮影所の入り口



ブース



フォーリー



エントランスホール

高速回線で東京と連携

ARBOR「回線」により、大容量のデータを高速にやりとりすることができ、横山氏は、「京都で撮影した映像を、東京に送る必要がなくなることが可能。多忙なお客様に足を運んでいただく代わりに、ただたたくても良い。また、デジタル収録やファイルベース化、4K化といった新しいワークフローに対応。より効率良く制作を進められるよう整備した」という。

新たに取り入れたのが、東京・大泉学園の東映ラボ・テックとの高速ネットワーク接続である。フットワークが提供する「Hオートロン」が提供する「H認定のシネマ専用音響設備」。

42席を用意した試写室には、メイヤーサウンドの「Ache」を備え、国内で初めて導入した。正確で忠実な音響が特徴の「X-80」で構成している。オーディオ製品「S3H」などを選択し、音響設計は「S3V」などを選択している。

日本音響エンジニアリングが担当した。サウンドスクリーンは最大で8Kに対応するイーストソンの「E8K」(横約4×縦約1.7)を採用した。極細の糸で織っているため音響透過性能が優れている。イーオンとNHKエンジニアリングシステムが共同で開発した。

なお、映像再生機は映画用にDLPプロシエクタを、ドラマも少ないが、MA室や編集室には以前より少ないが、MA室や編集室に編集機能をもたせたほか、編集ソフトやDAW、ヤマハのミキサー「O2R96」を設置し、多目的に使える「マルチルーム」を用意することで十分な設備数を確保している。

HARBORはアーカイブにも使う。東映では現在、「映像資産管理委員会」が映像資産のファイルベース化を進行。従来は制作が終わると、収録したHDCAMテープを東京に送っていたが、HARBORがあることにより、データを送ることが可能。さまざまな運用を考えているという。

横山氏は、「通常、撮影所内のポストプロは別組織として運営されているが、当所は、撮影所の製作部の一部であり直属の組織になっている。新しい名称とともに、より効率が良く質の高いサービスを提供したい」と話している。